

Scott, Mainwaring and Anibal Perez-Linan,
Democracies and dictatorships in Latin America
-- emergence, survival, and fall (書評)

著者	菊池 啓一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	56
号	3
ページ	172-176
発行年	2015-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/1476

Scott Mainwaring and Anibal Pérez-Liñán,

Democracies and Dictatorships in Latin America: Emergence, Survival, and Fall.

Cambridge: Cambridge University Press,
2013. xiv+353 pp.

きくち ひろかず
菊池 啓一

はじめに

比較政治学の一大テーマとして多くの研究者を魅了している政治体制論であるが、ラテンアメリカ地域における政治現象はその理論的發展に大きく貢献してきた。たとえば、経済発展が民主化を促すとする「リブセット仮説」に対して異議を唱えたオドネル [O'Donnell 1973] は、「官僚的権威主義 (bureaucratic authoritarianism)」論を1960年代のアルゼンチンやブラジルの経験から抽出した。本稿で紹介する *Democracies and Dictatorships in Latin America* もこのような知的伝統を受け継ぎ、ラテンアメリカにおける体制変動の分析を通じて従来の民主化論を再検討することを目的のひとつとしている。かつては非民主主義体制の国が大半を占めていた同地域であるが、いわゆる「民主化の第3の波」を受け、多くの国に民主主義が定着している。しかしその一方で、ベネズエラのように民主主義の退行 (erosion) がみられる国もある。では、「民主主義が持続もしくは崩壊した理由を説明するのは何であろうか。独裁が存続もしくは倒れた理由を説明するのは何であろうか。体制変動の波を説明するのは何であろうか」(p.1)。本書はこれらのリサーチクエスチョンを念頭に、ラテンアメリカ20カ国における政治体制の様相の計量分析と、アルゼンチンとエルサルバドルを対象とした政治体制の変遷に関する事

例分析を行ったものである。以下、本書の議論を概観し、その意義と問題点を指摘する。

I 本書の概要

本書は9つの章から構成されている。まず第1章では、前述のリサーチクエスチョンとともに、既存の研究のアプローチに対する疑問が呈される。貧困層が民主主義による所得の再分配を望むことを前提に、階級構造と民主化を結びつける研究が近年増加しているが^(注1)、ラテンアメリカでは貧困層や労働者階級がポピュリスト的な権威主義体制を強く支持したケースが数多く存在している。また、政治文化に着目するアプローチでは、民主主義は市民が民主主義的価値観を尊重している国で発展するとされているが、近年のラテンアメリカにおける市民の民主主義体制に対する支持は決して絶対的なものではない。そこで、著者らは本書全体の論点を紹介しつつ、大統領、政党、軍部などといった各国の主要な政治アクターに焦点を当てることの重要性を主張する。

次に第2章では、本書を貫く分析枠組みが提示される。各アクターは政策選好 (policy preferences) と政治体制についての規範的選好 (normative preferences) を有し、民主主義体制もしくは権威主義体制を支持する連合を形成する。そして、各国の政治体制はこれらの支持連合間のパワーバランスによって決定される。また、国際環境も、軍事介入などによって直接的に、もしくはアイディアの伝播などによるアクターの選好の変化を通じて間接的に、体制変動に影響を与える。以上の議論から、急進的な政策選好をもつアクターの存在、主要な政治アクターの民主主義体制もしくは権威主義体制への規範的コミットメント、民主主義に対する強い国際的支持などが体制変動に影響を与えるとする仮説が導出される。

これらの仮説を検証するため、第3章では本書で使用される変数が紹介される。当然のことながら従属変数は政治体制であり、1900年から2010年までのラテンアメリカ各国の政治体制が民主主義体制、準民主主義体制、権威主義体制に分類される^(注2)。一方、本書の議論で重要となる独立変数はアクターの急進的な政策選好および民主主義に対する規範的

選好、国際環境である。ここでは、各アクターの急進主義の程度や規範的選好が、それぞれ政策目標の実現のために法律を破る意思を表明したかどうか、権威主義体制の支配者を称賛したかどうか、等の基準によって数値化される。そして、本書の分析単位である国×年 (country - year) ごとに平均値が算出され、「急進主義」「規範的選好」変数が作成される。また、国際環境に関する変数として、ラテンアメリカ域内外の政治体制の状況だけでなく、アメリカ合衆国の対ラテンアメリカ外交に関するデータも変数として使用される。

続く3つの章では、第2章で提示された仮説の妥当性が検討される。まず第4章で、著者らは権威主義体制から準民主主義体制もしくは民主主義体制への変動を「移行 (transition)」, 準民主主義体制または民主主義体制から権威主義体制への変動を「崩壊 (breakdown)」と定義し、それぞれについて1945～2005年のラテンアメリカ20カ国のデータを用いた回帰分析を行う。その結果、主要アクターの民主主義に対する規範的選好が移行を促進し、崩壊を抑制することが明らかになる。また、権威主義体制における体制派の「急進主義」は移行を阻害するものの反体制派の「急進主義」は移行を促進すること、ラテンアメリカ各国での体制変動はアメリカ合衆国の外交政策よりも域内のトレンドの影響をより大きく受けること、なども示される。一方、第5章と第6章では、1983年の民主化まで頻繁に体制変動を繰り返してきたアルゼンチンと1900年から1984年までほぼ一貫して権威主義体制下にあったエルサルバドルに注目し、事例分析が行われる。そして、アルゼンチンでは、かつては民主主義に対して無関心もしくは敵対的であった主要アクターの規範的選好と急進的な政策選好が1976～1983年の抑圧的な軍政による支配を経て大きく変化したことが民主主義への移行とその定着に大きく寄与した点、エルサルバドルの民主化過程ではアメリカ合衆国の圧力が決定的な役割を果たし、それに付随して長年の間頑強であった権威主義体制を支持する連合が弱まった点などが指摘される。

以上の3章では各国の体制変動を説明することに主眼が置かれていたのに対し、第7章ではラテンアメリカという地域における国際環境の影響に焦点が当てられる。著者らは、第4章での回帰分析にお

ける推定モデルを用いたシミュレーションを行い、「動的効果」によってラテンアメリカに民主化の第3の波を発生させた国際的な要因の存在を確認する。加えて、そのような国際的な要因の具体例として民主主義的規範の伝播などを挙げ、そのほとんどがラテンアメリカにおける一連の民主化に貢献したと論じる。

準民主主義体制から民主主義体制への「深化 (deepening)」や民主主義体制から準民主主義体制への「退行」も「移行」や「崩壊」と同様に分析できるのかを確認すべく、第8章ではフリーダムハウス指標 (Freedom House scores)^(注3)を従属変数とする回帰分析が行われ、「急進主義」が各国の民主主義のレベルに負の影響を及ぼす反面、「規範的選好」の影響は即時的ではなく長期的なものであることなどが示される。そして、第9章では本書の知見が整理され、その議論が1936年のスペインや1933年のドイツにおける民主主義体制の崩壊や1977年のスペインにおける民主主義体制への移行にも適用可能であることが主張される。

II 本書の意義と問題点

本書の最大の貢献は、ラテンアメリカにおける民主主義体制の崩壊と民主化の双方を政治アクター中心のアプローチから説明したことにある。2000年ごろまでの比較政治学においては、オドンネル [O'Donnell 1973] をはじめとする民主主義体制の崩壊に関する研究が構造的要因を重視してきたのに対し、オドンネルとシュミッター [O'Donnell and Schmitter 1986] に代表される民主化研究は政治アクターの行動から体制移行を説明するという齟齬が生じていた。この問題に対し、ボイシュ [Boix 2003] らはゲーム理論を用いて両者の視座の統合を行った上で社会経済的要因の重要性を主張しているが、本書はラテンアメリカにおける民主主義体制の崩壊と民主化については、共に政治アクターに注目するアプローチの方が高い説明力を持つことを示した^(注4)。また、既存の研究では軽視されがちであった国際環境も積極的に分析に取り込み、個々の国の「移行」や「崩壊」だけでなくラテンアメリカにおける第3の波の発生要因も比較的クリアに説明している。さらに、推定モデルから得られる「移行」

や「崩壊」などの予測確率 (predicted probabilities) と実際の数字が極めて近いことも、本書の説得力を高めているといえよう。

ただし、本書は以下に挙げる4つの問題点を抱えていると思われる。第1に、急進的な政策選好という概念と政治体制に対する規範的選好という相関の高い概念を独立変数として併用することの妥当性である^(注5)。ここでいう急進的な政策選好とは、短中期的な政策選好の実現に向けての強引さをともなった政策スペクトル (policy spectrum) 上の右もしくは左への選好であり (p.14)、イデオロギーよりも政治アクターが早急に自らの好む政策を追求するかどうか、という点が強調されている。しかし、本文中でも述べられているように、急進的な政策選好を持つアクターは民主的なプロセスよりも早急な政策実現を優先するため、当然そのようなアクターの民主主義体制に対する規範的なコミットメントは弱くなる (p.44)。また、著者らは、両概念および国際環境はそれぞれ密接な関係にはあるものの多重共線性 (multicollinearity) の問題が生じるほどではない (p.48) としているが、特に第5章と第6章の事例分析においては、両概念を明確に区別していない記述も散見される。よって、ラテンアメリカにおける現実を明快に説明する際に相関の高い2つの概念の併用が適切であるのか、という疑問が呈されよう。

第2に、政治体制についての新変数を開発する必要性である。本書では、既存の研究のほとんどで使われているフリーダムハウス指標やポリティIV (Polity IV)^(注6)ではなく、著者らが独自に開発した変数が使用されている。これは、自由で公正な選挙、普通選挙、政治的・市民的権利の擁護、選挙によって選ばれた支配者による真の行政権行使という4側面にもとづき、各国を民主主義体制、準民主主義体制、権威主義体制に分類したものであるが、彼らがポリティIVを使用しないのは同指標が特に第二次大戦後すぐの時期について市民権の拡大を考慮しておらず、成人男性のみに対する普通選挙権をもって民主主義の基準を満たしているとしてしまっているためである [Mainwaring, Brinks, and Pérez-Liñán 2007]^(注7)。しかし、そのような問題であるならば、ポリティIVの部分的な修正で事足りるのでは、という印象は否めない。実際、著者らによれば、本書における民主主義体制はポリティIVの8～10、

準民主主義体制はポリティIVの3～7に近いという (p.70)。逆に、著者らの変数は三値変数 (trichotomous variable) であるため、第8章のような民主主義の深化や退行の分析には使用できないという弊害が生じてしまっている。

第3に、「急進主義」「規範的選好」変数を作成する際に単純に平均値を用いることの妥当性である。先述したように、両変数は国×年ごとに各アクターの急進主義の程度および規範的選好を平均したものであるが、この計算方法はいずれのアクターも各国の政治において同程度の影響力を有していることを暗黙の前提としている。しかし、たとえ本書の対象となっているアクターがすべて「主要アクター」であったとしても、大統領の選好の重要性が野党や利益団体の選好と同程度にすぎないとは考えにくい。また、特に民主主義が不安定な状態に陥っている際には、クーデタの担い手となる可能性のある軍などの選好がその国の体制選択に大きく影響するであろう。よって、何らかのルールにもとづき、加重平均を算出することが必要であると思われる。

そして第4に、エルサルバドルについては権威主義体制下での各アクターも分析されているのに対し、アルゼンチンの軍政期についてはほとんど検討されていない点である。同国は1983年までの間に頻繁な体制変動を経験したが、中でも1966～1973年の軍政と1976～1983年の軍政は「官僚的権威主義」体制であったとされている。そして、同体制下の軍部は「国家安全保障ドクトリン (national security doctrine)」^(注8)の影響を受けており、それまでの軍政とは異なって政権の座を無期限に維持することを目指していた [Close 2009]。よって、急進主義や規範的選好についてアルゼンチンにおける60年代以前の軍政期とそれ以降の官僚的権威主義体制期を比較検討することは、本書が目的とするラテンアメリカにおける体制変動を説明することにとって、きわめて重要であると考えられる。

以上のような問題点はあるものの、本書は社会経済的要因を重視する近年の政治体制論に一石を投じた好著であると思われる。また、書評者が挙げた問題点のいくつかは、著者らが分析で使用される概念を明確に定義し、その操作化についても詳述しているために指摘することが可能になったものである。研究書や研究論文の書き方の参考にもなるという意

味において、研究者だけではなく、比較政治学を履修する大学生・大学院生にも本書を薦めたい。

(注1) 政治体制論や民主化論の研究動向については、粕谷 [2014] と川中 [2009] を参照されたい。

(注2) 後述するように、著者らは民主主義の4側面として自由で公正な選挙、普通選挙、政治的・市民的権利の擁護、選挙によって選ばれた支配者による真の行政権行使を挙げ、4側面を完全に満たしている体制を民主主義体制、いずれかの側面について部分的な侵害が見られる体制を準民主主義体制、いずれかの側面について重大な侵害が見られる体制を権威主義体制としている。

(注3) 国際NGOのフリーダムハウス (Freedom House) によって毎年発表される指標。各国の選挙過程、政治参加、政府機能に関する項目 (「政治的権利 (political rights) 」) と表現の自由、結社の権利、法の支配、個人の人権に関する項目 (「市民的自由 (civil liberties) 」) が評価対象となり、「政治的権利」と「市民的自由」のそれぞれについて、該当項目数に応じて7点尺度で採点される。そして、「政治的権利」と「市民的自由」の平均が1点から2.5点の国は「自由 (free)」、3点から5点の国は「半自由 (partly free)」、5.5点から7点の国は「非自由 (not free)」に分類される。

(注4) ただし、オドンネルとシュミッター [O'Donnell and Schmitter 1986] が民主主義体制もしくは権威主義体制を支持する連合そのものに注目したのに対し、本書はその連合を構成するアクター自体に焦点を当てている (p. 31)。

(注5) 本書が急進的な政策選好を重視しているのは、チリにおける民主主義の崩壊を政党政治の急進化や分極化から説明したバレンスエラ [Valenzuela 1978] を意識しているためであると推測される。実際、これら2つの概念の併用を説明する際、1970～1973年のサルバドル・アジェンデ (Salvador Allende) 政権に言及している (p. 44)。

(注6) モンティ・マーシャル (Monty Marshall) を中心に進められている「ポリティIVプロジェクト (Polity IV Project)」で構築されている政治体制指標。執政長官 (chief executives) のリクルートメント、(主

に行政についての) チェック・アンド・バランス、政治参加に関するチェックポイントについて-10点から+10点の間で採点され、-10点から-6点の国は「独裁国 (autocracy)」、-5点から+5点の国は「アノクラシー (anocracy)」、+6点から+10点の国は「民主主義国 (democracy)」に分類される。

(注7) フリーダムハウス指標は1972年以降についてしか存在していない。

(注8) 大串 [1991: 9] は、国家安全保障ドクトリンを「ラテンアメリカの相対的に専門職業化が進んだ軍の軍人の見解において国家安全保障と密接に関連している、軍事・政治・経済・社会問題に対する彼らのドクトリンや前提の全体」と定義している。

文献リスト

<日本語文献>

- 大串和雄 1991. 「南米軍部の国家安全保障ドクトリンと『新専門職業主義』」『国際政治』98(10月) 8-22.
粕谷祐子 2014. 『比較政治学』ミネルヴァ書房.
川中豪 2009. 「新興民主主義の安定をめぐる理論の展開」『アジア経済』50(12) 55-75.

<外国語文献>

- Boix, Carles 2003. *Democracy and Redistribution*. Cambridge: Cambridge University Press.
Close, David 2009. *Latin American Politics: An Introduction*. Toronto: University of Toronto Press.
Mainwaring, Scott, Daniel Brinks, and Aníbal Pérez-Liñán 2007. “Classifying Political Regimes in Latin America, 1945-2004.” In *Regimes and Democracy in Latin America: Theories and Methods*. Gerardo L. Munck ed. Oxford: Oxford University Press.
O’Donnell, Guillermo A. 1973. *Modernization and Bureaucratic-Authoritarianism: Studies in South American Politics*. Berkeley: Institute of International Studies, University of California .
O’Donnell, Guillermo, and Philippe C. Schmitter 1986. *Transitions from Authoritarian Rule: Tentative Conclusions about Uncertain Democracies*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press (邦訳は真柄秀子・

書 評

井戸正伸訳『民主化の比較政治学——権威主義支配以後の政治世界——』未来社 1986年).

Valenzuela, Arturo 1978. *The Breakdown of Democratic*

Regimes: Chile. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

(アジア経済研究所地域研究センター)